

ることがあります。しかし、オリンピックで金メダルを獲得する選手でも同じことが言えるということは、どんな選手でも持つ共通の悩みとすることができます。それを克服するためには、「経験させる」ことが鍵になっていることがわかります。

それでは、他国はどうだったのでしょうか。オリンピックで好成績を収めた強国の選手構成をみると、興味深いデータを得ることができました。ほとんどの国で26-28歳の選手が最も多いのに対して、韓国は24歳、中国は22歳が最も多く選手がおり、更に中国はそれ以下の年齢の選手が他国に比べて突出して多くなっていました。これは、明らかに北京オリンピックで好成績を収めるために、若手の選手に大会を経験させようとする意図があります。

その一方で、日本選手の平均年齢は25.8歳でした。これは他の強豪国とほぼ同じ結果で、今回のオリンピックで好成績を収めるための布陣であったと言えます。その意味では、北京世代のこれからの成長には早急に国際大会での経験を積ませることが必要になるかもしれません。

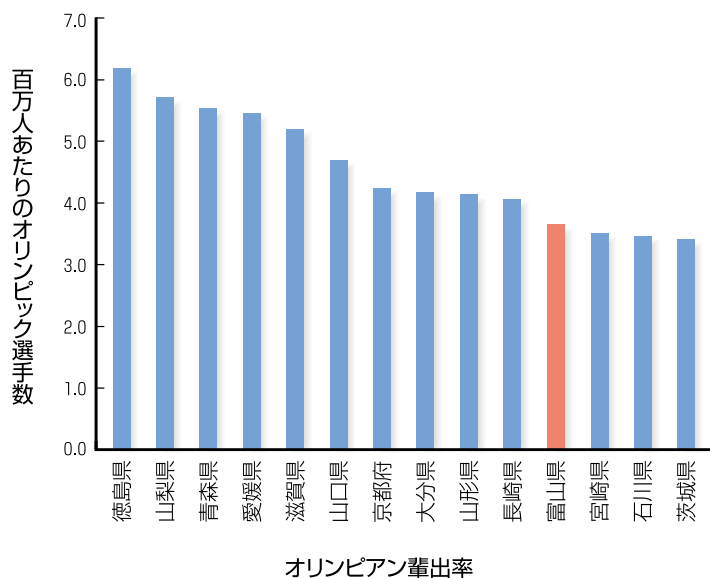
ジュニア期には試合も限られているので、指導者の立場としては都合良く若手ばかりを試合に出すことは難しいとは思いますが、次世代を担う選手に試合に出場させる場面を用意することも大切なチームマネジメントです。当然ではありますが、ジュニアからの試合のさせ過ぎもオーバーユースの障害を引き起こしたり、燃え尽き症候群となる例も聞かれます。強化と育成の両面を十分にバランスをとることは忘れてはなりません。

●富山県のアテネオリンピックを検証する

ここでコンディショニングを離れて、富山県のアテネオリンピックを検証してみましょう。

アテネオリンピックに出場した日本選手の総数は309名でしたが、そのうち富山県出身者からは以下の4名のオリンピック（オリンピック出場選手）を新たに輩出しました。

- 山田青子選手
[バドミントン；ダブルス]
- 山崎勇喜選手 [陸上；競歩]
- 谷井孝行選手 [陸上；競歩]
- 石田利佳選手 [ホッケー]



その他にも、出身は富山県ではありませんが、現在富山県のチームに在籍する選手が3名おり、更にはオリンピックの日本代表選手団総監督でありJOCの強化本部長である福田富昭氏も富山県出身でした。

富山県のオリンピックの輩出率を他の都道府県と比較してみましょう。オリンピックの輩出数で見ると、東京都や大阪府が最も多いのですが、人口あたりで換算すると、1位が徳島県で100万人あたりで6.1人、2位が山梨県で100万人あたり5.6人、3位が青森県で100万人あたり5.5名、富山県は100万人あたり3.6人で全国11位でした、これは夏季オリンピックのため、冬季を含めた集計が必要にはなりませんが、富山県も上位に位置するオリンピック選手輩出地と言えるのではないのでしょうか、ちなみに東京都はオリンピック総数は28名で最も多かったのですが、輩出率は100万人あたり2.3人と全体では28位でした。

残念ながら富山からメダリストは出ませんでしたが、オリンピック選手が身近にいることは、今後のジュニアの選手にとっても希望となることは間違いありません。